森の風ようちえん

「森の風ようちえん」は、菰野町千草に2007年に開園した認可外保育施設です。開園当初、小さくこぢんまりと、のんびりした保育を想定していました。園長の住まいの納屋を雨風しのげるように手直しし、田んぼのあぜ道を歩くイメージを持っていました。ところが思いがけず、借りた田んぼの大家さんから、倉庫になっていたスーパーマーケットを園舎に提供していただき、「先生、どうせやるならバリッとやろうよ。」と大家さんは言い、「大家の仕事だから」と改装まで施してくれたので、森のようちえんとしては珍しく立派な園舎をもって始めることができました。

地域の方々の後押しもあって、「森の風ようちえん」の今があります。

菰野町千草には、自然の恵みに添う暮らしや生活文化がかすかに残っています。「絆、キズナって言うけどさ、そんなん、おれら、昔からあったわさ。」と地元のおじいさんは言います。

少し前まで、日本中に互いに助け合いながら、丁寧に自然とともに生きる生活があったのです。森の風ようちえんは、そんな少し前の生活をなぞることを保育の軸にしたいと考えました。

礼子先生

「以前勤めていた幼稚園でも井戸を掘り、水を流し、木を植えて森をつくりましたが、本当の森や川は、人がつくったものとは全然違っていました。この地に住んでいた人が守ってきた森は本物で、スケールが全然違いました。

人工の川には、来る生きものが限られていて、本物の川に来るような魚やカニ、虫は来ない。本物の森や川は多様性が全く違いました。

本物の森に入るときは、生きものの気配やにおいがして、私たちがお邪魔しますという気持ちになります。また、季節を肌で感じながら、子どもたちが全身で体当たりしています。本当に子どもたちが喜んで遊びます。保育者は、過剰な制限をせずに済みますし、子どもも保育者もお互いに気持ちよく過ごすことができます。

子どもたちもそれを感じているからか、感覚や表情が豊かだと感じます。」

生まれ持った可能性

人は誰しも、人として良く生きよう、成長しようとする種のような力を持って生まれてきます。生まれ持った力があるから、教育が成り立つと嘉成園長は考えています。

その力を、どれだけ引き出せるかが、教育では問われることになります。

森の風ようちえんでは、いつも子どもたちが中心にいます。

年間のカリキュラムは作成しますが、子どもたちの姿を見ながら、どんどん変えていきます。その時々、子どもたちが向かい合っていることに合わせて変えていかなければなりません。子どもたちが、今何を求め、何に気づこうとしているのかに寄り添い、子どもに合わせて環境を選んでいくのが保育者の仕事です。

保育者自身が敏感になり、自分をどんどん変えていかなければならないことは言うまでもありません。

子どもの力

森の風ようちえん開園の頃は、実は、森や田んぼで子どもたちがどのように遊ぶのか、保育士が想像できていなかったところがありました。鍋でも持っていけば遊び道具にして遊ぶだろうと用意していましたが、そんなものがなくても、子どもたちは自由に遊びを作り出していきました。ただただ森の中を探検したり、木の枝を持ち、手あたり次第叩いてみたり、枝で絵をかいてみたり、どの子も同じような遊びから森遊びが始まります。

自然の中には何もないようでそこには全てがあります。何でも考え出せて、創り出せて、好奇心でいっぱいになり、夢中になれるところ。そんな好奇心のかたまりのような子どもに育ってほしい。何よりも、「遊び方まで決められたら、楽しくないじゃないですか。」と永慈先生は言います。

みんなで作ったお昼ご飯を食べるときも、当初3歳児には、熱いから、こぼすからと保育者がお味噌汁を盛り付けていましたが、それも、子どもたちには必要のないことだと直ぐに気づかされました。

いのちと向き合う

こんなことがありました。園児と一緒に山からの帰り道、猟師がシカを解体している現場に通り合わせました。大人たちは見せない方が良いのではと気遣いましたが、すでに子どもたちはしっかり目に焼き付けていました。しばらくして「ほら、さわってごらん。あたたかいよ。」と触らせてもらいました。

すると、園児から「わたし、トリさんのお肉もブタさんのお肉も食べたことある。」と言いだしました。

体験することで、子どもの中でいのちが繋がっていきました。いのちの感覚が子どもたちの中で目覚めていきました。

頭で考える前に、子どもたちは自然を受け入れていきます。体験からいろいろな物ごとのつながりを知り、繋がっていないと暮らしていけないことを学んでいきます。